方向

第一五四号　一九九三年三月三〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

飢えの国から来て　―法華経巡礼　八一―

1993 02 17　原田憲雄

06-05. さて、長老マハー・マウドガリヤーヤナと、長老スブーティと、長老マハー・カーティヤーヤナとは体をふるわせ、世尊をまばたきもせずに見つめた。またそのとき、それぞれ、心に、次の偈を合唱した。

atha khalv āyuṣmān mahāmaudgalyāyanaḥ sthavira āyuṣmāṃś ca subhūtir āyuṣmāṃś ca mahākātyāyanaḥ pravepamānaiḥ kāyair bhagavantam animiṣair netrair vyavalokayanti sma / tasyāṃ ca velāyāṃ pṛthak-pṛthak manaḥ-saṃgītyemā gāthā abhāṣanta //

06-06. ああ、尊敬されるべき偉大な勇者、シャカ族の獅子、最高の人よ、
わたしたちに同情し、仏の声を聞かせてください。（一〇）
決定的な時機であることを知って、わたしたちに、最高の人よ、
甘露をそそぐように、予言を授けてください、自在なるジナよ。（一一）
飢えの国から来たひとりの人が、よい食べ物を得たのに、
「しばらく待て」といわれたとしましょう、その食べ物を手にしながら。（一二）
ちょうどそのように、わたしたちは、小乗になずんで、

飢饉のときの衆生のように、仏の智慧を得ようとする。（一三）
まだ、わたしたちに予言を授けておられません、正しく覚った偉大なムニは。
手の食べ物を、まだ食べてはいけないというように。（一四）
そのように、不安なのです、勇者よ、無上の声を聞きはしたのだが。
予言を授けられたら、そのときわたしたちは満足するでしょう。（一五）
予言を授けてください、偉大な勇者よ、ひとびとの幸福をねがい、同情して、
貧しい心もなくなるように、無上のムニよ。（一六）

arhanta he mahā-vīra śākya-siṃha narottama /
asmākam anukampāya buddha-śabdam udīraya //10//
avaśyam avasaraṃ jñātvā asmākaṃ pi narottama /
amṛten'eva siñcitvā vyākuruṣva vibho jina //11//
durbhikṣa(W:durbhikṣād) āgataḥ kaś-cin naro labdhvā subhojanam /
pratīkṣa(W:pratīkṣya) bhūya ucyeta hasta-prāptasmi bhojane //12//
evam evotsukā asmo hīna-yānaṃ vicintiya /
duṣkāla-bhagna(W:bhukta)-sattvā vā buddha-jñānaṃ labhāmahe //13//
na tāvad asmān saṃbuddho vyākaroti mahā-munih /

yathā hastasmi prakṣiptaṃ na tad bhuñjita bhojanam //14//

evaṃ ca utskā vīra śrutvā ghoṣam anuttaram /

vyākṛtā yada bheṣyāmas tadā bheṣyāma nirvṛtāḥ //15//

vyākarohi mahā-vīra hitaiṣī anukampakaḥ /

api dāridrya-cittānāṃ bhaved anto mahā-mune //16//

この第一一偈と第一二偈を妙本は、

若知我深心　もし我が深き心を知って
見為授記者　授記せられなば、
如以甘露灑　甘露をもて灑（そそ）ぎ
除熱得清涼　熱を除いて清涼を得るがごとくならん。
如従飢国来　飢えたる国より来たり
忽遇大王饍　忽ち大王の饍に遇い、
心猶懐疑懼　心になお疑懼を懐き
未敢即便食　未だ敢てただちには食べざるがごとし。

と訳し、梵本とはかなり隔たりがある。しかし、その対応を問題にしなければ、妙本のここのところはなかなかの名文で、げんに「如以甘露灑　除熱得清涼　如従飢国来　忽遇大王饍」は、いまでも施餓鬼の法要には、この

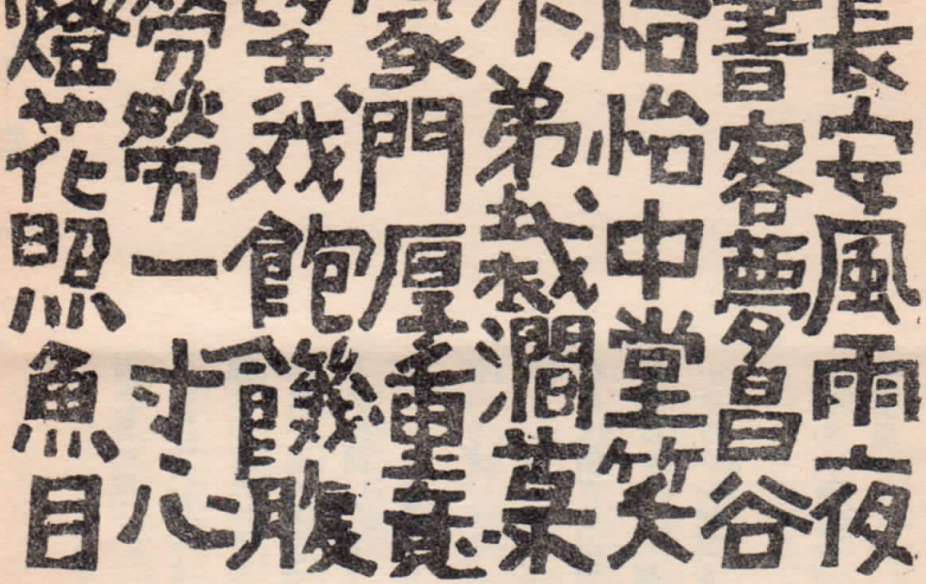
各一句を記した幡を、施餓鬼棚の四隅に立てている。

06-07. さて、世尊は、これらの偉大な声聞である大徳たちのこのような心のうちを熟慮し、さらに比丘衆のすべてに告げられた——

比丘たちよ、偉大な声聞である大徳スブーティは、三百万億の仏たちに恭敬し、師事し、尊敬し、讃嘆し、崇拝するだろう。そこで清らかな修行をし、菩提を完成するだろう。そのようにさまざまにお仕えして、最後の化身で、シャシケートゥ（月幢）という名の如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひと、としてこの世に現われ、知と行とを完成し、スガタであり、世間を知り、無上のひとであり、訓練されるべき人々の調御者であり、天神と人間との教師であり、仏であり、世尊であるだろう。

atha khalu bhagavāṃs teṣāṃ mahā-śrāvakāṇāṃ sthavirāṇāṃ imam evaṃ-rūpaṃ cetasaiva cetaḥ-parivitarkam ājñāya punar api sarvāvantaṃ bhikṣu-saṃgham āmantryate sma / ayaṃ me bhikṣavo mahā-śrāvakāḥ sthaviraḥ śubhūtis triṃśata(W:triṃśatām) eva buddha-koṭī-nayuta śata-sahasrāṇāṃ sat-kāraṃ kariṣyati guru-kāraṃ mānanāṃ pūjanāṃ arcanāṃ apacāyanāṃ kariṣyati / tatra ca brahma-caryaṃ cariṣyati bodhiṃ ca samudānayiṣyati / evaṃ-rūpāṃś cādhikārān kṛtvā paścime samucchraye śaśiketur nāma tathāgato 'rhaṃ samyak-saṃbuddho loke bhaviṣyati vidyā-caraṇa-sampannaḥ sugato loka-vid anuttaraḥ puruṣa damya-sārathiḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān //

この如来の名を妙本は「名相」とする。底本の違いによるのであろう。



山本のぶを刻（一九九二・一）

李賀　題　帰　夢　　家に帰った夢

長安の風雨の夜
書生は昌谷を夢にみる
にこにこと母は座敷で笑っておられ
幼い弟が谷間でカリヤスを採っている
家族はとっても望みをかけて
ひもじい腹を満たしてやる日を待っている
ちいさな心はそれを思うとぐったりだ
魚のように眠れぬ目をともし火が照らすばかりで

この詩は『蓼莪集』でも口語で訳しているのだが、このたび改訳した。その理由を述べるのには、別に適当な場所があるだろう。

（1993 03 18　原田憲雄）

春を待って

1993 02 14　　原田　慶

黄色地に黒で
GEKKODOと書かれた看板を
頭にのせたビルの前では
店員が遠くまで道の掃除に行っていて
ドアは開いたままだ
スタジオの奥でピアノの鍵盤が
ぎょうぎょうしく弾き手を待っている
ウインドウに並ぶギターとマンドリンの丸い形
今日は陽ざしが明るいから
桜草はレースの裾をいっぱいに広げ
シクラメンは耳をぴくぴくさせている

ゴムの大きなエプロンを首から掛けた
豆腐屋の主人は

ひどい神経痛の足をひきずって
三輪車で配達に出かけて行き
クリーニング屋では
新しい機械を買い入れたので
主人はますます張り切って働くつもり
早くあたたかくなるといいね
青い目のペルシャ猫はひもにつながれて
戸口で春を待っている

月光堂の店員が
赤い脚立をたてて
ガラス磨きをはじめると
窓の中ではトランペットやエレキギターが
きらきら合図を送ってくるが
街路樹はまだ枯木のままで
空はがらんと広い

川

1993 03 09　原田　慶

川はコンクリートで塗りかためられて排水路になり、水は浅くそこの水苔を洗いながら大急ぎで流れていた。わたしはぼんやりした記憶をたどりながら、川にそってせまいアスファルト道を上流へ向かって歩いて行った。水はうっすらと乳白色をおびてはいるが透明な感じで、ところどころで三段ほどの堰を走り下りながら、こぼこぼと音をたてている。川のすぐ傍までいっぱいに建ち並んだ家々には、赤い椿や沈丁花が川の流れに身をのりだして咲き、その日は暖かい陽がいっぱいに射していた。わたしが歩いている道の右手は高い土手で、一日じゅう陽があたり、オオイヌノフグリがいちめんに空色の花を振りまいていたりイラクサの若芽がびっしりと緑を敷いているところもある。川にそった道が行き止まりになって、石段を上がると道路に出た。橋を渡ると道は大きくまわって左に見ていた川が右になった。川は北から南に流れ、川巾は五メートルもあるだろうか。五分ほど歩いたところで川は突然コンクリートの塀にさえぎられて、上流が見えなくなっていた。中央に流水口があけられ、そこから水が流れ出ているだけである。

わたしの歩いてきた道は川から離れて西へ上って行く。新しい家が建ち、あたりの雑然とした様子から、ここがすこし前まで田や畑だったことを現わしている。しばらく上って行くと自動車道路に出た。最後の一枚の田に大きなマンションが建ちつつあり、まわりにはりっぱな邸宅が石組や塀をめぐらして人影は見えない。そのすき間の空き地はみんなガレージになっている。わたしの記憶ではこの辺りはもっと広い空間があり、まだ畑も残っ

ていた。そして今からわたしが捜してみようと思っているのは草地のなかに建っていた川の傍の一軒家なのである。川はこれらのガレージの下を流れているはずだと思って、ガレージの奥のほうへ入っていって下をのぞいてみた。その下は先ほどコンクリートの塀があったところの上流になり、ぼうばくとした河川敷が広がっていた。流れが運んだ土砂が積もって、広い楕円形の谷間になり、まん中を細く光りながら水が流れている。東側も高い土手になっていて、上には家が背中を見せて並んでいる。底から見上げたら天上に浮かんでいるように見えるかもしれない。

わたしはその家がこの河川敷に建っていたのだと思い当たった。その頃、まだわたしにはこのあたりの地形がよくわかっていなかったので、子どもに案内された家が、ただ不思議なところにある家だという気がしていた。後で考えてみると、河川敷は公有の土地だから、そこに勝手に家を建てることは許されないはずなのである。あれから十五年くらいたっ。まだあの家はあるのだろうか。どこかに河川敷へ下りる道はないかと思いながら、北へ向かって歩いて行くと、ガレージにはさまって、やっと一人通れるほどの道が、下へ吸い込まれるようについていた。

これを下りて行けば川へ出られるかも知れない。肩をすぼめて入って行くと、やはり河川敷へ出た。ガレージの下の崖にそって細い道がめぐり、トタン屋根の仮宿舎のような小さな家が並んでいる。どの家も人の気配はなく、ガラス窓から見える家の中には衣類などの掛かっているのが見える。一軒だけドアの開いている家があるが人は見えず、入り口のすぐ前のテーブルに大きな白いコーヒーカップがのせてあった。

家の間を通って川の流れている方へ行くと、広い河川敷には、ほかにも何軒か家があったが、ほとんどの土地は隅々まで耕され、ニンニクが整然と植えられていた。その中にたった一人だけ初老の男の人が、低い声で歌いながら畑の中にしゃがんで、ずっと仕事をしていたらしい。わたしには気づかないようで、ただ自分の仕事に熱中している。

川の東岸もずっと広がっていて同じように畑になっているが家は少なく、白梅が二本、紅梅が一本、満開の花をつけている。夏みかんの木も一本あってたくさん実がなっていた。ひとところに屑鉄が山のように積まれていて、自転車の輪などが見える。東と西にずっと高く見える家並みからは何の音も聞こえない。時間が止まったような不思議な別世界だった。しばらく立ちつくしたが、わたしの記憶の家はここにはない。あの頃もこの河川敷はこんなによく手入れされた桃源境だっただろうか。たぶん次々とここへ入ってきた人が、家を建て、耕してこんなに変えてしまったのだろう。川下にわたしが見てきたコンクリートの塀がこの河川敷と排水路を隔てているのが見える。土砂が流れ出すのを止めてあるらしい。

わたしが捜しているその家は、この川のすぐ傍に建っていた。わたしがこの地域の小学校で、初めて担任したクラスに、名前だけ在籍して姿のない男の子があった。行方不明だと聞いていたが、しばらくしてその子が学校に帰ってきた。家庭訪問をしてみると、じつに不思議な場所にその家は建っていて、すぐ前を細い川が流れていた。板囲いの小屋のような家に入ると、なかはよく整頓されて、ひとつづきの床にビニールのカーペットが敷かれ、カーテンで二間に仕切るようになっているらしかったが、その時はカーテンは開けられていた。いちばん奥

に祖先の霊が祀られ、手前の左側にガラス戸棚が置かれて、よく磨かれたグラスが並んでいた。子どものお母さんは落ち着いた感じの人で口数が少なく、ほとんど話さなかった。わたし自身の紹介をし、学校のことなどを説明して帰ったが、なにか物語のなかの出来事のように、このあたりの様子が心に残ったのだった。

その子どもはしばらく学校へ来たが、学用品を机のなかに置いたまま、またどこかへ消えてしまった。事情があって母親が誰にも告げずに姿を隠すので、そのたびに子どもも行方知れずになるらしい。ずいぶんたって、遠くの学校から指導要録を送るようにという依頼が来た。残していった学用品もまとめてそちらの学校へ送ったが、それから後、子どもが帰ってくることはなく、二度とわたしがその家を訪ねることもなかったのである。

畑の中に立って辺りを見まわしたが、その家の建っていた場所とは様子が違うので、また細い道を通って上に出て、さらに川の上流の方向へ歩いていった。途中で道が二つに分かれていて、狭い道が川のある方へ下っている。その道ぞいにも新しい家が建って川はさえぎられているが、それらの家のあいだに、鉄板の階段があって川の方へ下りているようである。家のあいだを抜けて行くと、川のすぐ傍へ出た。ここが河川敷の口のあたりで、ずっと南へ土砂の積もった土地が、あのコンクリート塀のところまで広がっているのだった。川はその真中あたりを小さく左右に曲がりながら流れて行く。さきにわたしが立っていたところは、このすこし川下になる。今は、すぐ目の前を川が音をたてて流れていた。ふと右うしろを振り返ると、驚いたことに捜していた家がそこにあったのである。入り口の外壁に大きく名前が書いてある。それも以前と同じである。家の前には、子どもの小さなシャツや靴下の洗濯物がたくさん干され、タオルが何枚か吊るされている。家は留守のようで物音はしない。

わたしはこの家の中を知っているのだが、いったいこの家はあの母子にとって何だったのだろう。ただ一時、身を寄せただけの避難場所だったのだろうか。もう二十歳を過ぎたはずのあの子はどうしているだろうか。このような土地に、おそらくは不法に住みついている人達に明日の保証はない。しかしこのよく耕された貧しくて素朴な暮らしはどうだろう。静かに楚々として咲いている梅の花、地形のままに作られた畑、すべてあるがままの自然を整えて、その中にひっそりと人間が生きている。わたしの子どもの頃にはこんな風景がどこにでもあった。機械の力を借りなかったから、人は手にあうだけの建物を造り、自然を壊さずに利用してきた。それはこの河川敷の暮らしと同じように、決して便利ではなかったけれど温かみがあった。

空を見上げると東も西も高いところに家が並び、ここらは谷間の窪地である。川には向こう岸へ渡る細い橋がひとつ掛けてあり、物干しから落ちたらしい青いタオルがその近くの木の枝にひっかかってじっとしている。陽がすこし西に傾いたらしく、川の向こうの夏みかんの黄色が濃くなったように思える。川だけがこぼこぼと音をたてて流れ続けていた、夢のように静まりかえったなかを。

沈　約

（中国の詩人と仏教　二九）　1993 03 14　原田憲雄

沈約は、字は休文、呉興の武康の人で、四四一年に生まれました。父の沈璞は宋の淮南太守でしたが、文帝殺害の事件に巻き込まれて誅殺され、約は母と身を隠し、赦免された後も貧しい暮らしをしながら勉学に励み、官

吏になって郢州刺史の蔡興宗に学才を認められ、安西外兵参軍兼記室としてその幕下に入り、四七二年、蔡興宗の没後、晋安王の法曹参軍となり、まもなく中央に出て尚書度支郎となります。

四七九年、宋が滅び斉が建国すると、三十九歳のかれは、文恵太子の幕下で征虜記室・襄陽令となり、四八二年、太子が皇太子になると、歩兵校尉・管書記として勤め、永寿省に入って四部図書を校定し、四八四年、太子家令で著作郎を兼ね、四八六年にかけて『宋書』を著わし、中書郎、司徒右長史、黄門侍郎、尚書左丞、御史中丞、車騎長史と順調に昇進し、竟陵王からも八友の長老として親遇されます。

四九三年、武帝が亡くなり、次のとし竟陵王が亡くなると、五十四歳になっていた沈約は東陽太守として転出します。翌年、明帝が即位し、まもなく沈約は召されて五兵尚書となり、国子祭酒に転じ、四九八年、明帝が亡くなり、皇太子の蕭宝巻が即位します。沈約は左衛将軍に遷り、翌年、母の老年を理由に解職を求め、改めて司徒右長史、南清河太守を授けられます。

五〇〇年、蕭衍が兵を挙げ、次のとし、皇帝が殺されます。六十歳の沈約と五十歳の范雲は、かつて八友のひとりとして親しく交友した蕭衍に、革命を勧めます。蕭衍はこの年、三十七歳でした。

五〇二年、大司馬・都督中外諸軍事・相国・梁王となっていた蕭衍は、明帝の子弟を殺し、前の年に江陵で即位した蕭宝融すなわち和帝を迎え、四月、和帝の譲りを受けて皇帝となり、梁朝を開き、天監と改元し、和帝あらため巴陵王を、その翌日に殺します。斉の滅亡です。蕭衍は後に梁の武帝とよばれます。

さて蕭衍は、皇帝になると「わたしが兵を挙げてから三年、みなそれぞれに苦労をかけ、努力してもらったが、

帝業をなしとげ得たのは、きみたち二人のおかげだ」といって沈約と范雲を優待します。沈約は尚書僕射となり建昌県侯に封ぜられ、以後、尚書右僕射、丹陽尹、侍中、太子詹事、尚書令、左僕射、中書令、太子少傅と進み、五一三年、七十三歳で亡くなります。隱侯と謚されました。かれは謙虚質素で、政治の実務においては范雲らに及ばず、武帝からも認められませんでしたが、学術文芸に卓越するひととしては、斉・梁二朝にわたって尊敬されました。

『宋書』一百巻を二年で完成したのは、宋の史官によってほとんど材料が整えられていたことにもよりましょうが、文惠太子や竟陵王のもとに集まった学者や文人が直接あるいは間接に編集を助けたからに違いありません。「正史」とよばれる中国の歴史は、編集する朝廷の考え方にたっているのですから、『宋書』にしても、斉の朝廷の意向が反映しており、そこに現われる史観や詩論は、著者沈約の考えを中核とするにしても、竟陵王の八友たちの談論が包括されていたことでしょう。

さて、『宋書』の第六十七巻は、すべてが謝霊運の伝記と批評です。伝記のなかに霊運の「撰征賦」と「山居賦」の全文を掲載します。「撰征賦」は、東晋の末に大尉・中外大都督となった劉裕が後秦の姚泓討伐のため北征し、洛陽から長安まで丘を進め、姚泓をとらえ、長安を平定し、彭城まで帰ってきたとき、霊運が天子の命によって使いし慰労したときの作で、いわば公式の文章の代表です。このとき、劉裕がまもなく天子の譲りを受けて新しい朝廷を開くであろうことは、ほとんどたれにも知られていました。凱旋将軍の慰労と称讃を目的とする霊運の文章が、悲哀の調子を帯びる意味は、みずからも革命の時代に生きる沈約には理解されていたでしょう。

「山居賦」はすでに本稿二二「山水詩」で述べましたが、私的な文章です。公的な歴史に私的な「山居賦」の自注まで漏れなくのせるのは、みずから「郊居賦」をつくって山水への愛好と仏道への傾斜を表明した沈約の、山水詩人・仏教文人としての謝霊運への親愛の現われで、また注の、新しい文学としての価値を見抜いていたためでもありましょうか。

伝記の後に「史臣曰く」として評論が展開されます。

まず、詩歌は人民の発生とともに始まったと述べ、中国の文学は詩経の後、前四世紀、楚の屈原と宋玉が先導し、前二世紀、漢代の賈誼と司馬相如がこれを継承したこと、一世紀の前後から王褒、劉向、揚雄、班固、崔駰、蔡邕などがそれぞれの個性を発揮しつつ清麗な辞曲を競ったが、時として音律に蕪雑をまじえたこと、なかで張衡はずばぬけてすぐれた絶唱を製作したこと、三世紀、後漢末から魏にかけて曹操、曹丕、曹植の親子が出るにおよんで「情をもって物を緯し、文をもって質に被らしめ」るようになったことなどを指摘します。取り上げた主題とそれをあつかう感情が一致し、表現する対象を読者に印象づけるこまやかな描写法がそなわった、というのでしょう。そうして、漢のはじめから魏にかけて、文体は三たび変化し、司馬相如を中心とする時代は形を写すに巧みであったこと、班彪、班固父子は情理を兼ね備え、曹植、王粲は気質を重視したと分析し、このときまでの文学は、いずれも詩経と楚辞の延長で、人間の嗜好風尚が時代とともに変化するので作風に変化が生じるが、本質的には大して変りはない、と見ます。

ところが三世紀後半の西晋の代にはいると潘岳、陸機というひいでた作家が出、かれらの文学は前代までのも

のとは違う、まったく新しいものだったというのです。

潘・陸ふたりの詩文の音律は班固や賈誼とことなり、文体は曹植や王粲たちのものとは変化している。星座のようにきらびやかな意想が、綾絹のように緻密に織りあげられ、梁の孝王の邸に集った司馬相如たちの放逸の響き、南皮に宴遊した曹丕を中心とする文人たちの高らかな韻を加味したもので、その遺風は晋の都が江南に移るにいたって終極した。

潘岳と陸機の文学が古い時代の文学とは異質のものであり、そこに価値の低下を見るのでなく、新しい価値の誕生を見るのは、すぐれた見解です。中国には古い時代ほどよいとする考え方が有力で、革新運動も復古の名で進められることが多いのですが、ここには時代の変遷はおのずからなるものとし、素朴から華美への変化は、人間の努力の現われだとみる、進歩に対する肯定的な文学観がうかがえます。

ところが、これに続く三一七年から四一八年におよぶ東晋百年は、老子や荘子を祖とする道家の哲学をかつぎ、幽玄をきどり淡遠をてらいはしたが、「過麗の辞、聞くなきのみ」力強く美しい文学はなくなった。けれども、四二〇年宋朝が開かれると、

顔延之と謝霊運が文名を挙げた。霊運の詩興は高翔し、延之の作法は明密で、前代のすぐれた詩人と肩を並べ、後代の文人の模範となった。

というのです。それでは新しい文学が古い文学に対して主張しうる特色はどこにあるのか。以下に展開するのは、謝霊運論のつづきですが、沈約が別に「四声譜」をつくって主張した、音韻調和の詩論の、要約でもあるのです。

五色がたがいに映発し、八音が協和してこそ、視覚や聴覚にこのもしい世界が実現する。音階が高下変化する際に、リズムやメロディーがおかしくないようにしようとするなら、次のような方法を意識的に採用すべきであろう。すなわち、前に軽く澄んだ音声のことばがあるなら、後ろに激しく濁った音声のことばをおく。一篇の文章のうちに使用することばはみな違った音韻のものとし、二つ並べる対句では、対応する言葉の軽重がかならず相反するようにする。この原則をよく理解し巧みに応用しえたものになってこそ、詩文と言うことができよう。…屈原以来、長い年代を経過し、文体はしだいに精密になったとはいうものの、わたしが指摘したこの秘法は発見されていない。高妙な詩句文章のなかには、その天成の音韻がこの理論に暗合するものもないではないが、意識的に達成したものではない。張衡、蔡邕、曹植、王粲らは、てんでこの理論に気づくことはなく、潘岳、陸機、顔延之、謝霊運は、はるかに後代の詩人である。しかし世に音律に詳しい人がいて、この理論によってかれらの作品を検証するなら、なるほどと納得されよう。このことばに誤謬はない。そんなことはあるまいと言われるなら、将来の哲人の判断に待とうではないか。

中国の詩や文章を構成する最小の要素の漢字には、見ken 群gun のように牙音(k g)で始まるものがあり、舌音(t d)で始まる端、泥、唇音(p b)で始まる非、微などがあり、歯音、喉音、半舌音、半歯音で始まるものもあります。これらの音のうち、k t p などは澄み、g d b などは濁っています。

kenはさらに、k なる音と en なる韻に、gun は、g なる音と un なる韻に、分析することができます。en un などの韻は、また平、上、去、入の四つの調子をもつことが知られています。

これらの中国語の音韻の変化や種類は、中国人ならばだれでも体験としてわきまえているわけですが、それをはっきりと意識にのせ、知識として分類するようになったのは、仏教とともに入ってきたインド言語学が中国の知識人に受入れられてからで、それがほぼこの永明という時代であり、その言語学を自覚的に学んで中国の文体学や詩学に応用しようとした最初の人が沈約なのです。

いまから考えると、さきに引いたていどの論議はあたりまえではないか、というようなものですが、それこそコロンブスの卵で、これさえ初めはなかなか理解されませんでした。梁の武帝なども、四声とはいったい何か、と問い、説明されても、おれにはそんなものがなくってもちゃんと詩も文章も作れる、といって顧みなかった、という話が伝えられています。沈約の「四声譜」はさらにさまざまな原理を提出していて、これが後の唐代に発達する律詩や絶句の基準となり、いまでも漢詩を作る人はその規則を学ぶことから門にはいってゆくのです。

沈約は、若いころは役人の技術として儒教を学び、知識人の教養として老荘の哲学をうけいれ、信仰として道教に傾いていたようですが、斉の文惠太子に仕え、竟陵王に親遇され、仏教徒となったようです。仏教徒になっても道教を捨ててしまわなかったらしいのは、他の中国の知識人と同様ですが、かれの散文作品の半ばが仏教に関わっていること、そうしてなかでも仏教の根本を慈悲に見定めた「究竟慈悲論」や、少年時代からのおのれの生き方が釈尊の教えから隔たっていることを反省した「懺悔文」などを読むと、仕える人に対する付きあいとしてやむなく仏教に親しんだ、というのではなく、心から帰依し信仰していたことが伺えます。

※前号正誤　八頁一一行　梵唄なでしょう　→　梵唄なのでしょう

恋慕の人

1993 03 17

原田憲雄

昨日は　思い出も新たな赤谷兄のご法事に詣で　感慨深いものを覚えました　貴兄が種々ご高配くださったご模様も　方々から承り　僭越な言葉ながら　有難く存じました

帰宅したら知人から窪田空穂先生の略歴をコピーして送ってくれていました　その中に空穂氏が

老衰の身にしみとほるさびしさを我にとどめて友多く死す

とうたっておられるのを読み　老衰とはゆかなくても老化の身　いたくひかれた事です　近年　多くの同窓同輩　先輩　後輩の方々が亡くなられます　赤谷大兄のご逝去は正に〃身にしみとほるさびしさ〃でございます

一九八六年「十月廿日夜十一時五十五分」日付の東森善城君の手紙の一節である。文中の「赤谷兄」とは、その年の九月十八日に亡くなった赤谷明海君である。「ご法事」とは、十九日に赤谷家で営まれた三十五日忌であろう。すでに日記をやめ、物忘れもひどくなっているわたしは、当日のことをほとんど覚えていないが、龍谷大学出身者が二三いて、あれは死んだ、これは寝たきりだ、といったことも話題にのぼっていたのであろう。

東森君はわたしと同じ一九一九年生まれだが、八月十一日のおそ生まれで、しかし、一九三六年、中学の四年修了で龍谷の予科にはいり、五年を卒業して入学したわたしと同級になったのである。いたって小柄なうえ童顔で、中学の一二年生くらいの感じであり、漫画に「フクチャン」というのがあったが、そのフクチャンにそっく

りだった。

一九九一年六月二十八日消印の手紙の末に、

原田大兄　玉案下

この「玉案下」なる語は　予科二年の時　貴兄に教えてもらったものです

と書いている。ほかにも、志賀直哉、三木清、梶井基次郎、堀辰雄、リルケ、ヤコブセンなどは「君から聞いてはじめて知った」と言われたことがあり、兄貴ぶって生意気なことを吹いていたのであろうか。

学部ではかれは仏教学、わたしは支那学と別れたが、今とはちがって学生数が少なく、体育や教練といった共通の学科もあり、ほとんど毎日のように顔を合わせていた。しかし、交際はわりあい淡白だったように、こちらは思っていた。

太平洋戦争のはじまった一九四一年十二月、わたしたちは三か月くり上げて卒業し、翌年二月、多くが現役で入隊したが、かれと赤谷君と山崎慶輝君は、予備役として残り、研究科に入った。後に聞いたところでは、仏教学専攻者の卒業成績は一番が山崎、二番が東森、三番が赤谷だということで、その三人が研究科に進んでくれたことは、兵隊になった者にとっても大きな喜びであり、慰めだった。

しかし戦争はたちまち激しくなり、青年がいつまでも学問に励むことなどは許されず、一九四四年三月、赤谷と東森は中部第二十三部隊に召集され、六月、いったん召集解除されたが、ふたたび臨時召集、数日後、大阪を出発し中国に送られた。そうして赤谷も、東森も、まもなく発病し、陸軍病院のあちらこちらをたらい回しされ

ながら敗戦をむかえ、一九四六年、前後して復員帰郷する。

一九八七年九月十六日付の手紙に、

柴野兄からは　赤谷君のいない僕の青春はどんなに寂しいものになっていたか判らない云々　との便りをいただきましたが　小生は　諸兄が兵役に服された以後　亡くなられるまでが　かれ（赤谷）がいない戦中戦後は　どんなにさみしいものになったろうかと　思われます

と書いているように、学生時代より、卒業後の数年のほうが、ふたりの友情を深めることになったのであろう。

「柴野兄」とは、やはり龍谷の予科以来の同窓の柴野純孝君である。

戦後のわたしたちは、ゆっくり互いに訪ねあういとまもなく、それぞれにむやみやたらに忙しかった。東森君は、奈良県宇陀郡室生村向淵の自坊正定寺で仏教青年会、仏教婦人会、日曜学校、ボーイスカウト、仏教壮年会などを組織し、村の人たちの教化に励んだが、やがて寺を成美夫人にゆだねて、法務省保護観察所に勤め、鳥取、奈良の所長を歴任し、定年でやめて自坊に帰っても、調停委員などの公務がつき従った。

赤谷君は入院するすこし前に奈良県立医大付属病院で東森君に出会い、心臓が悪いと聞き、自分のことより東森君の上を案じていたので、病状がよほど進んでいるのだろうかと、わたしも心配だった。けれども、ながいあいだ消息も交していなかったので、突然に見舞ったりすると、かえってびっくりしてよくなかろうかと、手紙は出さなかった。赤谷君が思いがけず早く亡くなり、その葬式に参ってくれた東森君に、じつに久し振りに会った。そうしてその後、たえず手紙や電話をもらうことになったのである。

あるとき本屋で『桐渓順忍先生追悼論文集』という本を見た。龍谷で真宗学を教わった先生なので、手にとってみると、東森君が追悼文を書いている。先生の学風に対する敬仰がしみじみとした筆で記されていて、うたれた。なかに「恋慕」だったか、それに似たことばがあるので、反射的に『法華経』如来寿量品自我偈の、

衆見我滅度　衆はわが滅度を見て
広供養舎利　ひろく舎利を供養し
咸皆懐恋慕　ことごとくみな恋慕をいだいて
而生渇仰心　渇仰の心を生ず

を想起した。

はじめて会った日からすればすでに五十年たっている。ところが、あらためて付きあってみて、わたしはいままでこの友をほとんど理解していなかったことに気づきはじめた。司法関係の国家公務員として長く勤めたのだから、いわゆる世渡りにおいては、わたしなど思いもおよばぬ修羅場もくぐり抜けてきているに違いないのに、かれには世間擦れしたところがまったくなく、わたしへの対応は学生時代とかわらなかった。さすがに態度や言葉は老成し、あの子どものような幼さはなくなっていたが。そうして、桐渓先生だけでなく、インド・チベット仏教学の月輪賢隆、天台学の佐々木憲徳、華厳学の高峰了洲などの諸先生に対する尊敬も、わたしのそれとはかけ離れた熱い思いであることが、おいおいわかってくるのであった。

かれは生前の赤谷君に七仏通戒偈を、西本願寺の勧学になった山崎慶輝君に聖徳太子の「以和為貴　無忤為宗」

を揮毫してもらっていて、こんどは君もなにかという。わたしは字を写すのがへたで、ことに大きなものは苦手である。断わって、それで済んだつもりでいるのに、手紙や電話のたびに「まだか」と催促される。いや、「催促」といったのではぴったりせず、強いていえば「恋慕」されるのである。仕方なく、むかし赤谷君の案内で香落渓（こうちだに）の唐招提寺別院へいったとき兜岳をうたった短歌と、「南の風」と題する戦死者への鎮魂の拙詩をしたためて贈った。その年の秋、赤谷紀美子夫人が唐招提寺塔頭西方院の石田智円和尚の車で別院をおとずれた帰りに向淵に立ち寄ったら、檀家参りから帰ったばかりの東森君が、すでに表装した七仏通戒偈と兜岳をならべて掛けた部屋に通してくれ、たいへん喜んでいた、ということを夫人から聞いた。ところがその後、「あれはあれとして、正定寺の客間に掛けられる何かお経の文句を」とあらためての注文である。半年ほど苦しんだあげく、四弘誓願の「仏道無上誓願成」を、以前に書いた「渇仰恋慕」と題する論文とあわせて贈った。

その表装もできたので、ぜひいちど見にきてくれ、と誘いを受けたのは次の年の春ごろだったろうか。寺は住職が不在では参詣のかたに迷惑だろうと思うので、わたしは法務のほかはめったに出ない。まして一晩泊りでということになると留守の手当てもせねばならず、なかなかその機会をとらえられない。なんども手紙や電話があり「死んでから葬式に来るより生きているうちに」といった言葉をうけると、あまり容態が悪そうでもないのにと思いはしても、ためらってもおられず、それならと日をきめたが、日が近づくとかれのほうに差し支えができ、かれがいってくる日はこちらがわるしで、一九九二年の盆すぎに電話をかけたとき、なにかあわただしい声をきいて気がかりだったが、うろうろしているうちに、十月二十八日、夫人からの電話で逝去を知った。前後に特に

異状はなく、起床がすこし遅いなとおもって見にゆくとすでに息が絶えていたらしい。

それよりさきの五月、雑誌『方向』に連載する「法華経巡礼」の第七二回に「四弘誓願」をとりあげた。「巡礼」は自身が『法華経』を読み返すために始めたもので、読んくださるかたの思惑は考えないことにしているが、このときはかれが読んだらなんと言ってくれるだろうかという気持ちがよぎった。かれの求めがなかったら、この論文めいたものをまとめていたかどうかもわからない。「四弘誓願」だけではない、『方向』に書いたものは、論文であれ、雑文であれ、そうしてわたしのものにとどまらず原田慶のものにまで、いちいち目を通して、手紙や電話で励ましてくれるのである。『方向』は小さい粗末な雑誌だのに、もったいないほどの読者諸賢にめぐまれて幸福な歩みを続けているが、東森君の「恋慕」にふさわしいようなものでは到底ない。けれどもその励ましによって、挫けそうな折々に、どれだけ慰められ力づけられたかわからない。「如来寿量品」は「心に恋慕を懐いて、仏を渇仰す」ともいうが、かれの師友への恋慕は、仏に対する渇仰の変化であり、その恋慕によって仏への渇仰を、師にも友にも誘ったのではないか。

三十日の葬儀には、赤谷夫人と待ちあわせて参列した。ひるごろ着いた室生口では暖かすぎるほどだったが、式の始まるころから曇り、風も出てきた。向淵の人たちはみな正定寺の檀家で、東森君の同級生であり、教化を受ける人であり、ボーイスカウトで指導された人たちであった。みなが読経し、焼香も、悼辞も、心のこもった手厚いものだった。師友を恋慕し仏を渇仰した東森善城君なればこそ、その最期をおくる法事がこのように営まれるのであろう。式がおわって、棺が寺の門を出ようとするとき、雲がはらはらとしぐれを落としてすぎた。